

# 博士の奇妙なプライド

Dr. Strange Pride

(or How I Learned to Stop Worrying and Love the Collaboration)\*

黒田 航

(独) 情報通信研究機構 けいはんな情報通信融合研究センター

## 1 はじめに

言語学者は非常に残念なことに、認知科学、(認知) 心理学、社会学などの周辺領域の研究成果を軽視し、蔑視する原因、関連領域の研究者との共同研究、意見交換に対して拒絶反応を示す傾向が非常に強い。このエッセイでは言語学者がなぜ関連領域の研究者とうまく意見交換ができないのかを考察し、その対処法を述べる。

## 2 言語学者の「奇妙」なプライド

### 2.1 “オレたちは権威だ!”

自覚症状があるとは限らないが、言語学者の多くは「奇妙なプライド」をもっている。あなたは秘かに次のように思っていないか、自問して欲しい:

- (1) “{オレ, ワタシ} (たち) は言語が何であるかに関して、誰よりもよく知っているし、わかっている”
- (2) “何しろ、{オレ, ワタシ} (たち) は、言語の権威なのだ”
- (3) “だから、言語のことになったら、他の分野の連中は — 言語心理学者だろうが、認知心理学者だろうが — {オレ, ワタシ} (たち) の相手ではない。奴らは言語については何も知らない、無知蒙昧な連中だ”

私もこれに気づいたのは、本当に最近のことだ。これに気づいて、私はやっと言語学者であることの苦悩が判ったような気がした。

### 2.2 “大人はわかってくれない”?

“{オレ, ワタシ} (たち) は言語が何であるかに関して、誰よりもよく知っているし、わかっている” という思い(こみ)は、多くの言語学者の研究者としての自我の中核を形成している。これは非常に強烈な自我なので、言語学者の大半は関連領域との見解の不一致が生じると、それに耐えられず、遅かれ早かれ — その速度は人によって違うが — 自分の殻に閉じこもり「あいつらは言語のことなんか、まったくわかっていない」と憤り、孤高を保ちつつ、甘美な誇大妄想に引き籠ってしまう。

これはあまりにもったいない。いや、それ以上に、せっかくのすぐれた知識を死蔵させているという点で、犯罪的である。

だから私は、敢えて進言する:

この種の奇妙なプライドは百害あって一利なし

である。

誤解のないように: 自分の仕事にプライドをもつことは非常に重要であり、有意義である。ただし、それはプライドが自分の実力に見合ったものである場合に限る。

言語学の明日のために心ある言語学者 (の卵) が (先輩のよろしくない素行を真似ずに) まっとうな科学者になる方法は、次の二つに一つしかない:

- (4) 自分のプライドに見合った実力を示すか、
- (5) 奇妙なプライドの余分な部分を捨てて、実力に見合ったプライドに収めておくか

前者の選択の方をした場合、あなたがしなけ

\* §2.5 の内容は中本 敬子 (京都大学教育学研究科) との共同執筆である。

ればならないことは膨大である。これに較べると後者の選択の方がずっと楽であり、私としてはこちらをお勧めする。

後者の選択をした場合、失われつつある関連領域からの信頼を取り戻すためにも、言語学者が心理学者と一緒に仕事をするのは悪くはない選択だと、私は思う。

### 2.3 奇妙なプライドを棄てて楽になろう

だが、そのために気休めしておくのは悪くないだろう。私は次の点を強調したい:

- (6) 言語学者が言語に関する完全な権威である必要はない。

この点に関して、多くの言語学者は無用な怖れを持っているのではないかと思う。言語学者は、心理学者相手に内心脅えている: “言語の権威として、例えば日本語学者は、日本語に関する全知全能を期待されているのではないか?” と。どうか安心を。実はそんなことはないのである。彼らだって言語がどれほど複雑な現象であるかは、言語学者とは違った体験を通じて、イヤというほど身に染みて知っている。

心理学者が期待しているのは、彼らがあまり得意としない課題刺激文の作成、特にその際の際の要因の統制である。やってみれば分ることだが、心理実験の課題文の作成は、非常に困難で、面倒な作業である。ただし、心理学者が欲しいと思っているのは“答え”ではなく、“導き”なのである。実際、それ以上のものは現時点では望みようがないことを彼らは知っている。何が正しいかを決めるのは実験結果であって、言語学者の知見ではないのである — この辺に関するありがちな誤解を避けるためにも、ハッキリと忠告しておきたい。

言語学者であれ、心理学者であれ、言語を虚心坦懐に科学する心で眺めたことのある研究者ならば、多かれ少なかれ次のことを自覚しているはずである:

- (7) 誰も言語の全貌など知らないし、当分、それが明らかになる見通しなどない。

これは気休めではない。事実である。それは、私たちを非常に苛立たせる反面で安堵させもする事実である。

言語は本質的に複雑であり、言語学者の直観の及ばない性質をもっている<sup>1)</sup>。

敵は想像以上に手ごわい。言語学者の独力で、紙と鉛筆というあまりに非力な解析手法で太刀打ちできるものではない。風車に立ち向かうドン・キホーテは確かに勇敢だったが、無知だった。彼の真似をして得をすることなど、何も無い。

言語学者はこれまで、言語という敵に対しあまりに無謀な闘いを挑んできた。簡単に言うと、敵を知らなすぎたのである。言語の本質 — 特に意味の本質 — に迫ろうと思ったら、多変量解析<sup>2)</sup>は不可欠である。

ここで関連分野の研究者との — 特に心理学者との — 共同研究の重要性が出てくる。言語学者が己の非力と無知を知り、それを克服するには、今から独力で頑張る必要知識を身につけるよりも、すでに必要な技能を獲得している関連領域の研究者、特に認知心理学者との共同研究がずっと効果的であると私は思う。実際、相手のことが理解できさえすれば、言語学者と心理学者は、お互いの長所で相手の短所を補い合う、非常に友好的な関係を築くことができる。

<sup>1)</sup> あなたがこれを認めないなら、私はあなたを言語の科学者だとは認められない。それはあなたが自分の研究対象の本質的特徴を誤認しているのが明らかだからである。それは自然科学者が、自然の本質が複雑ではなく、直観で理解できるぐらいには単純だと信じ、実はそうやって対象の本質を見誤り、歪曲してきたのと同じである。そして、それは「複雑系の科学」が現われるまで、何世紀も続いてきた。もちろん、自然、あるいは言語の複雑性を否定せず、それとは別に単純な側面を追及することは可能であるが、単純化側面と複雑な側面がどのように関係しているか、どちらが本来の姿なのか、などの問いには自明な答えなどないのである。

<sup>2)</sup> 私の知る限りもっともわかりやすい多変量解析の入門書は大村平(おおむら ひとし)氏の『多変量解析のはなし』(日科技連)である。この本は非常に優れた入門書であるが、一つ残念なのは、紹介されているのがクラスター分析(Cluster Analysis)、因子分析(Factor Analysis: FA)、主成分分析(Principal Component Analysis: PCA)のみで、多次元尺度法(Multidimensional scaling: MDS)の解説がないという点である。これは執筆の年代を考えると避けられないことだが、残念だと思う。因みに、大村氏はこのほかにも数多くの数学の入門書を著しているが、それによって数多くの「数学嫌い」を救ってきたことで有名である。

心理学者との共同研究の際に心に留めておくべきなのは、次の点である:

- (8) 心理学者は(特定の)言語の絶対的な権威であることを言語学者に要求も期待もしていない。

言語学者と心理学者が言語の性質について共同で研究する際、彼らの関係はどちらかというところ、一緒に船に乗って海を旅する海洋生物学者と海洋学者の関係に似ている。彼らは片や生物学者、片や物理学者であり、やっていることは相当違うが、それにも係わらず、彼らは広い意味での海の研究という目的を共有し、知見を交換し合い、助け合い、時には発見の喜びを共にすることができるのである。それが可能なのは、お互いが海という対象に対して、気が遠くなるほど無知であり、その無知を自分に対し、また相手に対して許せるからである。

というわけで、私は(特に若い言語学者に)次のことを勧める:

- (9) 私が最初に挙げた三つの特徴(1)-(3)に覚えがあるならば、自分のためにならない「奇妙なプライド」を棄てて、今すぐにも楽になろう。

これが言語学者が関連分野の研究者と共同で言語を研究するために超えなければならない最初の心の壁であり、結局は、それが本当に言語の科学をするためのイチバンの近道である。

#### 2.4 “あるバイアスの物語”

言語学者が心理学者と一緒に仕事をするためには、実はもう一つ障害がある。言語学者は、次のようなバイアスから脱却することを求められる:

- (10) 非言語学者への蔑視: (長年に渡って)言語を専門に研究している私から見ると、言語学者以外の言語表現の容認性の判断など、まったく信頼が置けない。素人の文の特徴に関する判断は頻繁に誤っている。
- (11) 統計的手法に対する蔑視、あるいは反感: だから、言語に関する専門的知識のない人々の容認性の判断をたくさん集めて、それを平均したところで、言語に関する

「正しい知見」や「真の洞察」など、絶対に得られるはずがない。

- (12) 自分の直観への過度の信頼: これに対し、私は言語学者として、(長年に渡って)自分の直観を磨きに磨いてきた。その成果として、私はどんな表現が正しいかを知っているし、どんな表現が文法的であるかを正確に判断できる。だから、私の判断と他の連中の判断が一致しない場合、常に私が正しく、他の連中はまちがっている。

このような自尊心と偏狭さと怖れが入り交じった態度には、多くの弊害が伴っている。その一つは例えば、数多くの言語学者が容認性判断の揺れのような現象をマトモに扱おうとしないという事実である。生成文法を代表とする言語学では通常、容認性の揺れは本質的な現象ではなく、無条件に成立するはずの法則に何らかの攪乱要因が影響することで生じる「誤差」だと見なされる。これが妥当な解釈なのかどうかは普遍文法(Universal Grammar)という名の“言語の形而上学(*a metaphysics of language*)”に訴えるのではなく、実証的なやり方で検証されなければならない<sup>3)</sup>。

これは明らかに経験科学者のとるべき態度ではない。言語学者がどう感じようと、言語は観察者の外部に、客観的に実在すると考えて記述を始めない限り、言語学は科学にはならない。実際、この態度の本質的な問題は、言語学者が言語の研究をしているのか、あるいは自分の直観の研究をしているのか判別できなくなるという点にある。これにはデータの代表性(representativeness)の問題 — つまり、言語Lのたった一人の使用者、あるいは、ある学派の言語学者のグループの判断が、言語Lの使用者全体の判断の代表になっているかどうかの問題が残っている。

心理学者が言語学者に望んでいることを端的に言うと、こうなる: 彼らはあなたの言語専門家

<sup>3)</sup> これは反対の反応だが、このような判断の揺れを単なる「程度の問題」で済ませるのは、それを否認するのと同様、まったく問題の解決になっていない。この点は[1]に詳しい。

として判断を仰ぎたいのではない．あなたの知識を調べたいのではない．彼らは「その道の権威」としてのあなたにお伺いを立てたいわけではない．そうではなくて、彼らが調べたいのは、あくまで一般被験者から得られた行動データ、例えば反応時間、項目の評定値である．なぜか？

心理学では、あなたの個人的な判断を調べてわかったことを、ヒトの集団の一般的特徴 — 例えば日本語を母国語とするヒトの集団全体の — 一般的特徴として語ることは許されてはいない．それは心理学の学問としての成立基盤に由来する原則であり、それが現行の言語学の「常識」と同じでないという理由で相手の手法を変えることはできない．この点を理解しない限り、心理学者との共同研究はまず実りがないだろう．

偉大な言語学者の言動を真に受け、現行の言語学が「正しいやり方」をしていて、自分と違った作業原則に従っている相手 — 例えば心理学者 — が「間違っている」と信じるのは勝手だが、実はその信念が正しい保証はどこにもないのである．

## 2.5 認知心理学者との共同研究の内容

心理学者の立場からすると、言語学者と心理学者の共同研究には例えば、次のような利点がある．

- (13) 言語学者が上手く作った言語材料を使えば、普通の被験者の微妙な直観を非常に細かく引き出せる．

[2] が“襲う”の意味フレームに関する共同研究を始める前、三人のうち一人の心理学者は、その辺の大学生があんなに細かい意味の区分をできるのかどうか強く疑っていた．だが、実験結果が示したのは、被験者が驚くほど微細な意味の差を検出していることだった．

これを可能にしたのは明らかに言語学者によって巧みに作成された材料文と評定項目である．多くの心理学者は、被験者に意味の区分について直接内観報告を取ると、返ってくるのは非常に大ざっぱな答えでしかないことを知っている．だが、この事実の解釈は簡単ではない．[2] が示唆した可能性は、これは言語学を専門としない一般の日本語話者が微細な意味を分かっ

てないということではなく、その言語化が困難であることにすぎない、ということである．

同じことを心理学者が、言語学者との共同研究なしに達成できたかどうかは、かなり怪しい．このことを考えると、言語学者が材料文や言語材料の操作に必要な要因を指摘し、心理学者が実験や調査に載せるために技術的な調整を行うという形で連携すれば、心理学者だけでは引き出せない反応を引き出せるのは、大いに期待してよいことであるように思われる．

言語学者が（心の底では）心理学者と意見が食い違うことを恐れているなら、それは心理学者でも同じことである．心理学者は実験のために様々な言語材料を作る．だが、論文の中ではどんなに虚勢を張ってたとしても 100% の操作は達成できていないことをイヤというほど知っている．これは言語の成り立ちが解明されていない以上、当たり前のことだ．このため、心理学者にしてみれば、実験に使った言語材料を言語学者に吟味されるのは相当の覚悟がいることである．心理学者も言語学者を恐れている．

実験や調査を始める前の段階で意見を調節することが可能であるなら、まったく話は別になる．より精度の高い材料を使って、より信頼性の高い反応を引き出したいと思っているのは、心理学者の強い願いなのであるから、言語学者との共同作業によって従来とは違った種類の苦勞が新たに生じることがあっても、それで望んでいた成果が上がるならば、それはせいぜい報われる努力だと割り切ることができる．

[2] が示したのは、言語学と心理学の（下請け的でない）共同研究の可能性である．従来、言語学者と心理学者の共同研究は統語論の分野で多いが、その内実は下請けの研究であることが圧倒的に多い．

もう一つ重要なのは、[2] が意味の実体の問題に深く切り込んでいる点である．これは従来の統語論中心の言語学と心理学との連携とは大きく異なる．

[2] が示した形での言語学者と心理学者の連携がもっと一般化すれば、心理学だけでなく、言語学にも色んなフィードバックがあるのではないかと思われる．文理解中の推論、テキストの

記憶、意味活性化のタイムコースなどを調べるための実験手法はそれなりに蓄積されているので、それらの知見が取り入れられると期待できるし、統計的な手法も、一般的には心理学者の方が得意であり、もしも認知言語学の目標の一つが、一般人の言語使用の実態を解明することで言語の本質に迫ることにあるなら、共同戦線を張るのは、まったく悪くない戦略である。

海外の心理学系の研究では、既に言語学者との本格的な共同研究(コーパス解析+心理実験とか)が出始めているが、言語が相手となると、英語や何かで得られている知見がそのまま日本語(と日本語話者)にも通じるかどうかは怪しく、一つ一つ確認していくしかない。

## 2.6 研究スタイルの違い

だが、明らかに心理学と言語学には大きな研究スタイルの違い、発想の違い、価値の違いがある。例えば、

- (14) 心理学者はなるべく正確に事例にあてはまる“質素な説明”を見出すのを美德とし、喜びとするが、言語学者はなるべく多くの事例にあてはまる“強欲な説明”を見出すのを美德とし、喜びとする傾向が強い。
- (15) 心理学者は説明できること、説明できないことを境界がハッキリすることを好むが、言語学者は説明できること、説明できないことを境界がハッキリすることをあまり好まない。
- (16) 心理学者の大部分は説明できない現象が存在しても、それと引換えに文句なしに説明できる現象があれば満足するが、言語学者の大部分は説明できない現象が存在することに免疫がなく、ありとあらゆるものが説明できないと、「正しい」説明ではないと感じる傾向がある。
- (17) 心理学者は結果の再現性、つまり、ある分析結果を他の誰かがやっても同じ結果が得られることを重視するが、言語学者はこれを尊重する伝統がない。言語学者は優れた研究者の「職人芸」を尊重する傾向が強い。

これらを事前に承知しておくことは、共同研究を目指すに当たって本質的に重要である重要である。

オモシロイのは、最後の一点を除いて、ここに挙げたいずれの点に関しても、生成系と認知系とでは大きく差があるということである。生成系の研究倫理は、言語学の中では心理学に近い。これはおそらく、統語が実験に乗りやすいという条件と並んで、言語学者と心理学者の共同研究に生成系の研究が圧倒的に多い理由の一つであろう。

## 3 言語学版“地獄の黙示録”

言語学者が理論物理学者のように猛烈に頭の良い連中ばかりで構成されているならばともかく、言語学者の大半は他の領域では実力を発揮できないような限定された能力の持ち主であることを考えると、(4)の方針がうまく行くとは思われない。それでなくとも、この種の孤立主義を保ちながら成功した例は非常に少ない—これが当てはまるのは数学ぐらいだろうか?—少なくとも経験科学の中にはない。

### 3.1 地獄の相談相手

コンサルティングに基本があるとすれば、それは「相手が何を知りたがっているか」を知ることである。それがわかって初めて相手の相談に乗れる。

言語は複雑な現象であり、多くの分野の人がそれに関して一歩進んだ知見を採り入れ、あわよくば自分の分野で革新をなしとげようと思っている。多くの人がこんな風に思っている:

噂によれば、世の中には言語学者という連中がいるらしい。噂によれば、彼らは言語の専門化だということだ。噂によれば、言語学者は言語について人の知らないことをいろいろ知っているらしい。おお、そうだ。彼らと話をすれば、何か重要なヒントが得られるのではないだろうか?!?!

そういう期待を胸にして、いろいろな分野の人が言語学者の意見を聞きに来る—心理学から、工学から、哲学から、ときには法学から。

だが、彼らの期待は空しい。

そういうクライアントを相手に言語学者のす

ること、それは、相手に自分の見解を、自分が言語の本質だと思つたものを — 例えば言語の認知的基盤だとか、普遍文法の意義だとか — 一方的に押しつけることである。相手の意見など、これっぽちも聞かずに、相手の背景など、お構いなしに。

これが従来の言語学だった。

これはコンサルティングではないし、一度でもこういう経験をしたら、話をもちかけた人は誰でも自分の浅はかな誤りに気づくだろう：「ああ、{オレ、ワタシ}はバカだった...もう言語学者なんて相手にするまい」と思うだろう、マトモな神経をした人間ならば。

こうやって、言語学者はとんでもない再生のチャンスを潰してきたのだ。分野間コミュニケーション能力の欠如故に。あるいは、偉大な指導者を盲信し、彼らが示した道に盲従したために。

もったいない。これは、あまりにもったいない話である。言語学者は、こうして自分の技能を社会的に活かさないでいる。

コンサルティングに基本があるとすれば、それは「相手が何を知らたがっているか」を知ることである。それがわかって初めて相談に乗れる — そんな小学生でも — いや、小学生はムリだとしても中学生なら理解できそうなことすら分らないような連中が跳梁跋扈している言語学という世界は、まちがいに魔窟だ — 魔窟と呼ばれて、それでもなお楽しいのは、あの漂うフレンチ・レストラン *Loin d'ici* だけだ<sup>4)</sup>。

### 3.2 “オレたちに明日はない”??

いや、言語学者のやっていることは、もっとセコイ — 彼らは認知科学、認知心理学のような周辺領域の研究結果が自分たちの研究の方向とうまく合致するとなると、もう見境なく取り込む一方で、それが自分たちのやっていることに矛盾するとなると、今度は体よく無視するか、あれこれ難癖をつけ、まるで穢れ物に触るかのようにして排斥する。言語学者のやっている人には純真な人が多く、それがハレ/ケガレの極端な区別に結びついているのかも知れない。

言語学者は言語学以外の領域では能力を発揮できないような異能の持ち主である率が高いので、そういう人たちの典型的な行動としてみれば、彼らがこの種の極端な自我防衛手段に出る理由も理解できないわけではない。

だが、この種の偏狭さ故に関連領域との共同研究が疎外され、言語学が学際的に切り離れている一因であるのは明らかで、荒木飛呂彦風に言うと「コーラを飲んだらゲップが出るのを同じくらい確実<sup>5)</sup>」である。実際、言語学者が認知科学、(認知)心理学、社会学などの周辺領域の研究成果を軽視し、蔑視する原因、共同研究、意見交換に対して拒絶反応を示す本当の原因は、この辺にあるように思われる。

いや、問題はプライドの有無ではないのだ。

問題は、言語学者のプライドが実力につり合ったプライドかどうか、なのだ。別の言い方をすれば、言語学者は本当に自分らが信じているほど、あるいは信じたいと思っているほど、言語のことがよくわかっているのか?ということである。

私はこれを根本的に怪しいと思う。そして、そう思っているのは、私だけではない。

### 3.3 言語学に明日はあるか?

言語学者が学会で専門的な話をすればするほど、話の内容は一般人が言語だと思っているものからかけ離れてゆく。外部者には「自称」言語学者の説明が深遠な事実の説明なのか、それとも壮大なホラ話なのか、容易には判別できなくなっている。

これは他の分野の学会とは大きな違いである。本当に進んだ学問は、素人が聞いていてもスゴイ内容が話されているのかそうでないのか、なんとなくわかる — 正確には、学会の参加者の反応でわかる。言語学の学会の一部の発表では、その道の専門家であるはずの言語学者たちの顔は、ペーペーの院生と同じくらい困惑している。実際、私は言語学の発表を聞いて「これはスゴイ」と感じたことはほとんどない。

こんな状態の言語学に、はたして明日はあるのか?

<sup>4)</sup> 佐々木倫子の『Heaven?』を参照。

<sup>5)</sup> 荒木飛呂彦の『ジョジョの奇妙な冒険』を参照。

### 3.4 “裸の王様と私”?

後ろ指を指されるのがイヤで、みんな黙っているが、そろそろ声を出して次のように言うべきではなからうか? — 裸の王様は誰だ?

それにしても、言語学会は今だに裸の王様の家来で一杯だ ....

### 参考文献

- [1] 黒田 航 (2004). 認知 (科学) 的に妥当なカテゴリー化の (計算可能) モデルの提唱. 日本認知言語学会第 5 回記念大会 *Conference Handbook*, 57–60. JCLA.
- [2] 黒田 航・中本 敬子・野澤 元 (2004). 状況理解の単位としての意味フレーム実在性に関する研究. 日本認知科学会第 21 回大会発表論文集, 190–191. 日本認知科学会.